A Man for All Seasons 考

茂　野　優　子
中　村　美津子

I

歴史上，著名な人物を主人公とした文学作品は，東西にかかわらず数多くみられるが，*A Man for All Seasons* (1960) という作品も，イギリスの歴史上，また文学史上後世に名を残したトマス・モア(Sir Thomas More,1478—1535)を主人公とした戯曲である。作者ロバート・ボルトは，1924年8月15日，マンチェスター近くのセイルに生まれ，その地のグラマースクールから，大学へと進学し，卒業後教師となり，その間に，生徒のために児童劇や，ラジオ・ドラマを書いていた。そして，1957年，*Flowering Cherry* の上演成功を機に，教職を離れ，劇作家としての道を歩むことになり，以後，*The Tiger and Horse* (1960)，*A Man for All Seasons*，*Gentle Jack* (1963)，*The Thwarting of Baron Bolligrew* (1956)，等を発表している。とりわけ，*A Man for All Seasons* は，映画化されさらに日本においても上演されるなど，彼の才能が，イギリスの文壇劇壇に認められた一作である。

史実によると，トマス・モアは，法律家，ジョン・モアを父として，1478年2月6日にロンドンで生まれている。幼い頃から，才智を認められたモアは，1492年オックスフォード大学に進み，ここで初めてギリシャ（・ラテン）の学芸と出会った。2年後，彼は，ロンドンに戻り，法律家，政治家としての基盤を固め，1504年には，国会議員となった。しかし，ロンドン市民の利益を代表して，ヘンリー7世の無法な要求に反対したことにより，公職を退くこととなり，修道僧になるべく，厳しい修行の道に入った。この時期，イギリスでは，大陸より遅れたとはいえ，

人文主義の学問が，次第に広まりつつあり，モアも，この学問に深い関心をよせるようになっていた。この新しい学問への道を選んだモアは、僧侶になることをやめ，27歳のとき，ジェーン・コルトと結婚をする。そしてジェーンが4人の子供を産んで6年後に死亡すると，アリス・ミドルトンと再婚した。子供達の中でも，特に長女のマーガレットは，モアに似た知性と学識の持ち主で，その夫，ウィリアム・ローパーは，後に，モアのすぐれた伝記を書いた。モアは，家庭にあっては，教育熱心な父親で，その家庭はなごやかな雰囲気にみちみちていたという。

1509年にヘンリー7世が死ぬと，モアは，ヘンリー8世の即位を寿ぐ詩を書いて再び公職に戻った。1515年アントワープ特派使節として，公職による海外旅行の余暇を利用して *Utopia* の執筆を始め，翌年完成し，刊行をみるに至っている。この作品でモアは，原始共産社会，戦争の否定，宗教の自由を唱え，今日からみても，ヒューマニズムにみちた優れた考えを打ち出しており，*Utopia* はイギリス文学史に忘れ得ぬ名を残している。

またこの頃，ヨーロッパでは，ドイツを中心として宗教改革の気運が高まっていった。モアのように，カトリック的信仰によってヨーロッパの統一を保とうとする努力では追いつけぬほど，宗教と国家の対立は，日ごとに大きくなっていったのである。

ヘンリー8世が，女王キャサリンとの離婚問題をきっかけとしてローマ法王と対立しはじめたのは，この頃であった。この問題収拾に失敗して失脚したトマス・ウルジーのあとをついで，1529年モアは大法官に就く。しかし，ローマ教会から離脱するという国家の方針に従うことのできなかったモアは，1532年5月19日に大法官を辞し，その後1年間著述を続ける。そして，最後まで自己の信仰を捨てることのできなかったモアは，1535年7月6日，断頭台で生命を断たれたのであった。

II

A Man for All Seasons は2幕から構成されており，照明と簡単な舞

台装置——舞台には階段とテーブル，イスが置かれている程度——によって1幕では7つの場面，2幕では9つの場面が巧みに展開されてゆく。またこの場面と場面をつなぎ話の進行にあたるのが，Common Manと呼ばれる人物である。彼は，幕が上がると，black tightsに身を包み小道具を入れた大きなバスケットを前にして立っているが，劇中，場面に応じて，バスケットの中から衣裳を取り出し，身につけては登場人物の1人となって，その場面の状況や人物の説明をし，場面をスピーディーに転換させている。

第1幕の最初では，Common Manは，モア家の執事マシューとなり，晩餐の支度を整えたり，モアのもとへ枢機卿ウルジーからのよびだし状を届けたりするが，次の場面では船頭の衣装を身につけ，ウルジーとの会談を終えて，帰途につくモアを運ぶ。その後，再び執事マシューとなって，モアの動向を探る者たちの質問に答えたり，モアと立場を異にする者が密談する飲み屋の主人ともなる。しかも，Common Manは，場面が変わる時の小道具や後片づけも一人でやり，またイギリス史の本を読む形で，舞台の外でおこった状況を説明し，数年が経過した次の場面へと話をつないでゆくなど，速かに劇を進行させてゆく。第2幕では没落したモア家から離れた後，モアが幽閉されている監獄の牢番となったり，モアを国王にそむく者として裁く法廷の陪審長となったりするが，最後の場面に至っては，死刑執行人となってモアの首を斬る役をつとめるのである。

また彼は，時として，登場人物達への批判家ともなる。たとえば，モアに仕える執事となったときには，モアの性格や，買収に右往左往する政治家に対して，また舟頭に身を変えたときには，社会体制に対して，一見ふざけた台詞の中にも皮肉の目をむけている。

この劇の幕切れに，死刑執行人のマスクをはずしたCommon Manは，

I'm breathing. . . Are you breathing, too ? . . . It's nice, isn't it ?

It isn't difficult to keep alive friends... just don't make trouble—or if you must make trouble, make the sort of trouble that's expected. Well, I don't need to tell you that.

Good night. If we should bump into one another, recognise me[1].

という台詞を口にする。このように時と場合に応じて態度を変え，面倒なことをおこさずに生きてゆくという態度は，モアが最後まで，自分の信念を変えず，殉教者として果てたこととは対照的である。Common Man の Common とは，私達市民の代表'common to us all'[2] という意味なのである。つまりこの劇では，Common Man の目を通して，私達市民の生き方，考え方さらに，社会に対する批判が顕現されているといえよう。

以上のように，Common Man の役割をみてくると，彼は，ギリシャ劇に登場していたコロス (chorus) の機能を果たしていると考えられる。コロスとは，元来，劇の前，あるいは途中で，観客の理解を助けるように話の進行に関与したり，登場人物の性格や行動を，市民の目をもって見てゆく存在であった。Commor Man はこの劇において現代演劇で忘れられている一つの劇的機能を効果的に果たしているのである。Common Man の導入により，この劇に現代的な視点が附与されより強固なリアリティが加わることになる。

III

ローマ教会から袂を分かつという時代の大きな節目に生きたがために，政治の世界にかかわらざるをえなくなった知識人モアの苦悩を，この作品の中に見出すことは容易である。劇の始まった段階で，既にモアは公職につき，王の信頼も厚く，その名は多くの人々に知れわたっていた。だが，彼は自ら望んで，この立場に立ったわけではなく，

. . . , I was commanded into office ; it was inflicted on me. . . .[3]

と言っているように，王の懇望によって公職についたのであった。彼は本心では静かな学究的生活に心ひかれている。このことは，実社会での出世を夢みているリチャード・リッチという学生に教師となることを勧める時の口ぶりから，察せられる。つまり，リッチは，教師が世間での名声をあまり期待できない仕事であると不満を示すのであるが，モアは，教師には 'a quiet life[4]' があると，感慨深げに言うのである。このように，書斎での平穏な生活を望みながら，政治の世界へと引きずり込まれたことが，モアの悲劇の発端となったと言えよう。

モアの意思にかかわりなく，歴史は非情に進んで行く。ヘンリー8世は，ローマ法王から特別な許可を得て，ヘンリーの兄の寡婦キャサリンと結婚したのであったが，彼女との間には世継ぎとなる男子がいなかった。そこで，ヘンリーは，このことが聖書で禁じられている兄の寡婦との結婚に対する神罰であると考え，さらにアン・ブリンという恋人がいたことも手伝って，キャサリンとの離婚を，法王に働きかけたのである。しかし，法王は，この離婚を認めようとはしなかった。そのため，モアの周囲は，宗教改革とルネッサンスという激動の時代を背景として，宗教と政治の衝突の余波を受けてあわただしく揺れ動くこととなったのである。

モアは，王の離婚を推進する枢機卿ウルジーに呼び出され，協力を要請される。ウルジーは，国家のために，世継ぎの必要性を説き，モアに政治に携わる者ならば，'your own private, conscience[5]' には，目をつぶるように迫るのであるが，モアは頑なにそれを拒む。

> I believe, when statesmes forsake their own private conscience for the sake of their pullic duties . . . they lead their country by a short route to chaos.[6]

と，たとえ公の立場にあっても，個人が良心を持ち続けることの重要性

をモアは信じて疑わない。この後ウルジーは，王の離婚の許可をローマ法王から得ることに失敗したため王の不興を買い，1530年11月29日，大逆罪の疑いでロンドン塔へ護送される途中死亡してしまった。その後を継いで，モアが大法官に就任するが，彼はこのように政治の中枢に位置するようになっても，自己の個人の信念を曲げることをしなかったのである。

このモアの信念を覆そうと策略をめぐらすのが，クロムウエルという新進気鋭の官僚政治家である。彼は，モアとは対照的に，有能ではあるが陰険で冷たく，時代の流れに乗って権力に近づき得る人間である。彼は政治について，

> . . . it's much more a matter of convenience, administrative convenience. The normal aim of administration is to keep steady this factor of convenience—[7].

と，自己の信念とはかかわりなく，政治には便宜というものが重要であるとする考えを体得している。

最初は，一介の鍛治屋の息子でしかなかったクロムウエルは，彼のこういった考えによって，次第に頭角を現わし，ウルジーの秘書となった。さらに，ウルジーが死んだ後には，ヘンリー8世に仕える身となり，枢密顧問官にまで成り上がる。その間にも，イギリスの外的事情は，ローマ教会からの離脱という方向に向かっていった。

2幕になるとモアのもとへ，イギリスの宗教界のローマ教会からの独立の知らせがもたらされる。モアは自己の信念のために，その方針を承認することができず，自ら大法官を辞すのであった。

> But what matters to me is not whether it's true or not but that I believe it to be true, or rather not that I believe it, but that I believe it . . .[8]

と言うように，彼の内部には簡単には打ち砕くことのできない信念があり，その聖域には敵も味方も，決して踏み入れさせなかったのである。妻のアリスが，

Be ruled! If you won't rule him (King), be ruled![9]

と，王に従うように，説得しても，モアは，

I neither could nor would rule my King. But there's a little . . . little, area . . . where I must rule myself. It's very little—less to him than a tennis court.[10]

と，自分の内部には，誰にも侵すことのできない領域——それは，たとえちっぽけなものであったとしても——があるという心情を吐露するのである。身内のどんな涙も，この聖域を崩すことはできなかったし，どんなに強い敵の脅迫も，この信念を揺がすことはできなかったのである。

しかし，モアは向こう見ずに，がむしゃらに，自分の信念を押し進めて行くだけの殉教者ではなかった。法律に長けたモアは，

. . . in silence is my safety under the law, . . .[11]

と，自分の信念を表明して法に触れるようなことはしないのである。このモアと対照的な態度をとるのは，モアの娘マーガレットの婿ローパーであった。以前のロウパーは，カトリック教会の内部の腐敗に批判的であったのだが，ローマ・カトリック教会からの離脱という事態を前にして，今や猪突猛進型のカトリック信者となっていたのである。そして，彼が，このイギリスの事態に，真っ向から不賛成を唱えようとした時，

More : I'll keep my opinion to myself, Will.
Roper : Yes ? I'll tell you mine—!
More : Don't ! If your opinion's what I think it is, it9 High Treason, Roper ![12]

というふうに，モアは彼を戒めるのである。以後，モアは頑に沈黙を守る。かといって，モアは肉体の死を恐れているのではない。彼が恐れたのは魂の窒息——精神の死——だったのだ。

この頃，歴史の担い手が，封建貴族から，その下のジェントリーと呼ばれる階級（中小地主・法律家・医者・商人など）に移っていった。この劇においても，この状況が反映されており，その没落貴族の代表としてノーフォークという人物が登場してくる。彼は，鷹狩りや乗馬といった 'a kingly pastime[13]' に熱中する典型的な貴族であり，モアの友人であった。

ノーフォークは，モアが自己の信念を貫くために，沈黙を守るのとは対照的な態度をとる。才能のある者が台頭してゆく時代にあって，昔ながらの貴族である彼のような人物が生きのびてゆくためには，大きな権力の前に膝を屈してしまわなければならなかったのだと言えよう。

公の立場にいるモアばかりではなく，家庭人としてのモアも，この劇には描かれている。彼には，再婚した妻アリスと，先妻の忘れ形見マーガレットという娘がいた。家庭にあってモアは，温和でユーモラスだが，時には厳しい人柄の持主でもあった。そのモアを，慕い，理解のまなざしをもって見つめているのは，妻アリスではなく娘のマーガレットであった。このアリスは，今でこそ身分ある女性の地位についているが，商人階級の出身であり，そのことに関して，強いコンプレックスを抱いている。1幕において，ノーフォークと，貴族の娯楽について話し合っている場面で，彼から，馬に乗れないことを指摘された彼女の 'Am I a City Wife ?[14]' という台詞にあらわれているように，アリスには，この成り上がり者意識がつきまとって離れないのである。

モアが，個人の立場と，公の立場との間で板ばさみとなり，苦しんでいる時でも，彼は自分が本当に考えていることを家族の誰にも明かさなかった。それは，家族のことを信じていなかったというわけではなく，もし，彼に反逆の烙印が押された場合，家族に害が及ぶのを避けたかったためにほかならないからである。

やがて，モアの家族は，モアが大法官を辞任したことにより，没落する羽目に陥った。召使い達も離れていってしまい，かつては暖かかった家も，火の気もなく，食事も粗末なものとなってしまった。このように，最低の生活に身をやつしても，モアは，自己の信念を変えることなく，自分に疑いがかからないようにと，沈黙を守り，最善を尽くすのであった。しかし，モアの周囲は，彼の沈黙を黙って見逃すことはできなかった。モアの政敵は彼の沈黙に言葉に表わされる以上の批判を感じとるのであった。

この後モアは幽閉され，反逆罪の嫌疑の取り調べを受ける。その場には，以前の友人であり，大きな権力の前に屈服したノーフォークや，時代の波にうまく乗ったクロムウェルらが，列席していた。この席においても，モアは沈黙を守るだけであった。

最終場面である法廷において，国王至上命に宣誓するように，強く求められたモアは，個人の美徳と，人間社会の政治の板ばさみになっていたが，結局，断乎たる個人の美徳を貫いて，この宣誓を拒否したのである。愛する娘マーガレットが，

Then say the words of the oath and in your heart think otherwise[15].

と，忠告するのも聞かず，モアは断頭台への道を歩んだのである。

IV

モアは，激動の時代に生き，さらにその中で周囲から重要視されていた人物であったがために，自ら望むところの平穏な生活を送ることはで

きなかった。公の生活にひきずりこまれた彼は，自分の信じている事柄と，公の世界での事柄との間に立つことを余儀なくされたのである。しかし，彼は，公の世界のために自己の信念を捨てることはできず，どんな強力な力の前にも屈することはなかった。そのため彼の前には死が，彼の家族の前には没落の道があるだけだったのである。大きな犠牲を払ってまで彼が守りつづけた自己の信念とは一体何であったのだろうか。*A Man for All Seasons* はこの複雑な問題を一人の人間の外と内からドラマの世界に見事に立体化している。それにしても時代は移り変わっても，モアのように，自分の信じる道を最後まで，まっとうする努力や態度は，私達の心に強く問い訴えかけてくるのである。「君たちはどう生きるのか」と。

Notes

1) Robert Bolt, *A Man for All Seasons*（金晃堂，1968 年），p.113
2) ibid., 6117
3) ibid., 65
4) ibid., p5
5) ibid., p13
6) ibid., p13-14
7) ibid., p49
8) ibid., p60
9) ibid., p39
10) ibid., p39
11) ibid., p63
12) ibid., p55
13) ibid., p22
14) ibid., p7
15) ibid.,693